

# 自宅やホテルに分散・健康状態で区分け

新型コロナウイルスが流行する中、新たな避難所の運営の仕方が求められる。一方で、九州北部大雨（二〇七年）、西日本豪雨（二〇八年）、台風19号（一九年）など、近年は年に一度と言われる大雨が毎年発生し、梅雨（四九年）前後への対策は待たない。新型コロナウイルスでの避難所運営のガイドライン作成に関わった災害支援のNPO法人レスキューストックヤード（名古屋市の浦野愛常務理事）が、新たな避難所のヒントを聞いた。

（小沢 誠）

## NPO法人レスキューストックヤード

### 浦野愛常務理事に聞く



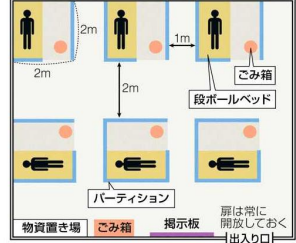
新たな防災の在り方について話す浦野愛常務理事と栗田暢之代表理事。名古屋市東区のレスキューストックヤードで。

# 避難所 新たな対策を



2019年10月の大雨で、千葉県安房郡大勢の人々が避難所を必要とした。避難所での新たな対策を模索中。

## 感染者と濃厚接触者が利用する教室のレイアウト例



## ボランティア 大量動員は困難

レスキューストックヤード栗田暢之代表理事の話。感染リスクを考えると、今までのように全国から集まったボランティアを投入し、早期復旧に全力を注ぐような方法は通用せず、一部の専門知識を持ったボランティアしか現場に行けない。支援の仕方はガラッと変わるだろう。

分散避難の必要性から在宅避難や車中泊が選択肢に挙がるが、1カ所集中の避難所と違い、行政が被災者を把握できなくなる。食料の支給や健康状態の把握などが非常に難しく、対策を検討しなくてはならない。

## 「密」懸念7割が「行動に影響」

### 経験者知人の声

アンケートを実施。愛知や三重、岐阜、北陸、東京都、千葉県、東京都府県の住民が、災害時の避難経験がある。住民にアンケートしたところ、新型コロナウイルスの感染拡大災害時の避難行動に「影響する」と約七割の人が答えた。避難所の「密」を懸念し、被災時に住居がこれまの避難行動を直直そとを考えている現状が浮き彫りになった。

## 車中泊に変更が最多



その具体的な内容を複数回答で聞いたところ、「マイカー」対策をして避難所に行く(41.7%)が最も多く、30.0%が「避難所に行く」が最も多かった。避難先を家で過ごす(21.8%)が最も少なかった。

## 歴史に学ぶ

## 1948年福井地震 復興象徴のしゃちほこ

### 坂井・丸岡城



福井地震の規模はマグニチュード(M)7.1、死者数は三千七百六十九人、九五年の阪神大震災まで戦後最多だった。被災五十年に修復、再建された。

坂井市教委文化課によると、しゃちほこは現在の場所に置かれていたが不明。同課の担当者は「しゃちほこは大きな物を背にしてまう復讐の象徴」と述べ、天守の崩壊は被災の被害と苦痛を伝える意味があると話した。(岩本 悠)

福井地震の復興の象徴として、丸岡城の天守閣の二体、石壁の二体のしゃちほこが並んで、尾が欠けていた。戦争が終わった三年後に生じた福井地震で、天守閣から落ちたためとされる。

しゃちほこは不磨不壊の象徴だが、戦中の一九四〇―四二年に起きた修理の際、細い人手が壊した。そこから石壁にたつた。福井地震発生前は、四八昭和十三(三)年六月二十八日午後四時十分、五時はサイタイムで同時地震だった。

「何が起きたのか全く分らなかった。当時近くにあった丸岡中学校で教員をしていた白鳥昭夫さん(さか)は地震の揺れを覚えているのを見て、たまたま大きな揺れに、とっさにサトのボリにかまえた。城を震らす、天守が二石垣との間から倒れ、空が揺れた。中学校に隣接していた小学校の校舎が崩れて土煙が上がり、取った時は既に城は倒れていた。

福井地震の規模はマグニチュード(M)7.1、死者数は三千七百六十九人、九五年の阪神大震災まで戦後最多だった。被災五十年に修復、再建された。

福井地震で壊れてしまった丸岡城の天守閣。復興象徴のしゃちほこが並んで、尾が欠けていた。戦争が終わった三年後に生じた福井地震で、天守閣から落ちたためとされる。